

料金後納

ゆうメール

(株)育脳寺子屋MAC 本部教室 MAC真成熟
〒616-8156 京都市右京区太秦西野町20
電話:(075)871-0374 FAX:(075)882-3777

2017年
4月号

Mathematics Abacus Chinese character

MAC NEWS

お子さんが大人になった時、社会で活躍できるヒントがいっぱい！！

「本当に頭が良い人」を育てる 七つの力（続編）



先月号の MAC NEWS で「本当に頭の良い人とは？」という内容を書きました。

その答えは「他人を幸せにできる人」でした。覚えておられましたか？

教育業界で20年以上指導され、今までに100冊以上の教育書を書かれた先生は著書の中で、以下の7項目が「本当に頭が良い人」を育てると書かれていました。

- ①「魅力」・・・人が集まってくる人間としての器
- ②「体力」・・・全ての活動の土台となる基礎体力
- ③「やる気」・・・自分から楽しんで行動する力
- ④「言葉の力（国語力）」・・・全ての学力の土台となる力
- ⑤「見える力と詰める力（算数力）」・・・意図を読み取り粘り強く考える力
- ⑥「親子力」・・・親と子どもの関係から生まれる力
- ⑦「あそぶ力」・・・物事を柔軟に考えられる力

先月書ききれなかった部分を、今月号にまとめたいと思います。

言葉の力(国語力)を伸ばすには

先日、ある記事を見てショックを受けた事があります。

マイナビが2017年2月に18年卒の就活生を対象に実施した「ライフスタイル調査」では、友人とのコミュニケーションに使うツールはなんと9割がLINEでした。一方、電話と答えたのは1.3%とごくわずか。スマートフォンの保有者は98.5%と「ほぼ全員持っている」状態ですが、通話の頻度は少ないようです。

面と向かってコミュニケーションを取れる社会人が、端的に用件を伝えるツールとしてLINEを使うのは良いと思いますが、今の学生たちは小さな頃からケータイを与えられ、夜中まで友達とグループ内でLINEをしています。そうすると、そのLINEこそがコミュニケーションとなってしまいます。

しかしよくお分かりの通り、LINEは短い文でやり取りが続けられる為、コミュニケーションとは言えません。

20年以上採用市場を見てきた就職情報大手、マイナビ(東京・千代田)の栗田卓也HRリサーチ部長はこう言います。

『今どきの就活生は、LINEやフェイスブックの無料対話アプリ「メッセージ」など、文字だけのコミュニケーションに慣れている世代だ。しかも、同世代の友人とのやり取りがほとんどなため、急に大人と接触する機会が訪れたり、電話で話そうとしたら緊張してしまう。さらに、「非通知」の電話には出ないという学生が少なくない』

ある企業の採用試験では、メールでは文章も完ぺき、好印象だった学生も、実際に面接を行ってみると人の顔を見て話さない、はっきりしゃべれずモゴモゴひとり言のように話す・・・

結局この子は不採用になった・・・という事例もあったのだとか。

東証マザーズ上場のアプリ開発会社の人事担当者も「電話の対応はチェックする」ときっぱり答えます。面接やインターンシップ（就業経験）など、「よそ行き」の顔がいくらしっかりしていても、電話のやりとりができなければ評価が下がるのです。

企業ではチームでする仕事が多いので、コミュニケーションスキルは仕事の成果に関わります。そう考えると、さすがに電話が全然できないのは困りますね・・・ちなみに、この会社はメールの返信の早さ、遅さなどの対応力までも見ているといいます。

結局、筆記や面接の準備をどれだけしていたとしても、それ以外の部分をしっかりチェックされるわけです。付け焼刃ではどうにもなりません。

かなり話がそれてしまいましたが、コミュニケーションの元となる「国語力」は結局のところ、全ての学力の「もと」となります。つまり、国語力は学力そのものと言っても過言ではないのです。

では、その国語力はどのように伸ばす事ができるのでしょうか。

少しプレッシャーをかけてしまうかもしれませんが、国語力を伸ばすカギは「ご家庭の中」にあります。

言葉を「正確に聞き、正確に話し、正確に読み、正確に書く」為には、子供の頃から「ことばの厳格さ」を身につけるべきなのです。

先述の著者は教育業界で数十年指導されているので、親子の会話を聞くとどの程度その子が伸びるのかが、すぐに分かるらしいのです。

言葉に対する「家庭文化の差」は学力の差に直結してきます。伸びる子の親御さんは、ことばに対する感度が高く、表現も正確なのです。

例えば、子供が「サッカーは嬉しい」と言った時、

「そういう時は『嬉しい』じゃなくて『楽しい』の方がピッタリくるね」とすぐに、それも自然に正しい言葉づかいを教えようとします。

あとは「お父さん、お母さんが本をよく読む」「お父さん、お母さんが辞書をよく引く」というご家庭だと、子供は「ことばの厳格さ」を積み上げていきます。

子供に国語力を身に付けたければ絶対条件が一つあります。それは「親が変わる」事だけなのです。「ゲームなんかしていないで本を読みなさい！勉強しなさい！」と言いながら、テレビを見たり、スマホを覗き込んでいる親の言う事を、子供は聞きません。

あと、特にご注意頂きたいのが

「マジ？」「っていうか」「うざい」「最悪」といったくずし言葉やマイナス言葉を使わない事です。これらは必ず子供が真似するようになります。

子供は無意識に「親（特にお母さん）が使っている言葉は正しい」と認識する為、何の疑問も無くそれらの言葉を真似するようになるのです。

塾で国語の勉強をしたり、漢字の勉強をすることも大切ですが、それ以上にまずは「家庭における言葉の文化」を見なおしてみませんか。

親子力 ～親と子どもの関係から生まれる力～

親は誰もが我が子を頭の良い子に育てたいと思っています。しかし、子供を思う親心が空回りして、逆効果になってしまうこともあります。ここで、よくある「親の学習感の7つの勘違い」をあげてみたいと思います。

① 勉強の問題は速く解けなければならない

→早いに越したことはありませんが、それを重視し過ぎると「じっくり考える力」が置いていかれます。高学年になると、ほとんどの教科が「文章題」になるので、問題によっては、じっくり粘り強く考え続けることが必要です。

② 外で遊ばせるよりも、本を読ませるべき

→本もちろん大切ですが、こどもに「自分の頭で考える力」をつけさせるには、五感を刺激する外遊びが一番です。やる気、集中力も外遊びで養えます。

③ 「できないこと」を「できる」ようにさせるのが先決

→テストが85点だった場合、85点取れた事よりも取れなかった15点が気になり、どうしてミスしたの？とつい責めてしまうものです。子どもは「親の表情」を見て、敏感にそれを感じ取ります。否定する前に、褒めることも大切です。

④ 「ドリル」はたくさんやらせた方が良い

→山ほどのドリルを与える親御さんもいますが、量が多すぎると「理解する」という為の勉強が「量をこなす」という目的に変わってきます。その結果、分からない問題もそのままにして、とにかく先に進めるという癖がついていきます。量は少し減らしても、納得して次に進める事が大切です。

⑤ 同じ失敗を何度もさせてはいけない

→「何回言ったら分かるの!?!」「さっきも言ったでしょ!?!」と感情的に叱りつける事はありませんか？子供は大人とは違い、何度も同じ間違いをしてしまうものです。「今度はできるようになろうね」と長い目で、気長に言い続けることが必要なのです。

⑥ ノートはきちんと書かせなければいけない

→ノートも綺麗に越したことはないのですが、中には「綺麗に写す」ことが目的になってしまい、全く授業を聞いていなかったり、理解しようとしていない事もあります。多少読みにくくとも、「大事な要点を自分が分かるようにノートに書く」ことができる子は、伸びしろが大きいのです。

⑦ 小学校低学年と、高学年の「子育ての仕方」は同じが良い

→イモ虫がサナギになり、サナギが蝶になるように、人も心身ともに子供から大人へと変化します。子供はおおむね10歳(小学校4年生)を境に大きく変わります。個人差はもちろんありますが、この頃からは子育ても変えなければなりません。

以上が、「親の学習感の7つの勘違い」です。

自分に当てはまるものはいくつありましたか？当てはまったものは「勘違い」なのです。これから、考えを直して行きましょう。

子育てには二つの時期がある

先述の内容に「小学校低学年と、高学年の子育ての仕方は同じではない」と書きましたが、もう少し詳しく書きたいと思います。

子育て期は大きく分けて二つに分かれます。

幼年期（～10歳前後）は落ち着きがなく、同じ失敗を繰り返す、計画性が無い、恨みを持たない、などの特徴があります。しかし、何か嫌な事があっても尾を引かず、次へ進んで行ける時期でもあります。

思春期（10歳前後～）はミニ大人へ変わっていきます。この時期には自立心が芽生え、大人の本音を知りたがり、親に反抗心を持ったり、親以外の絆を求めるようになります。

この頃になると「最近反抗的な態度が多くて・・・」と嘆く親御さんが増えますが、それは自立心が芽生えた証拠なので、むしろ喜ぶべきことなのです。

幼年期の間は「親の言う事は正しい！」という姿勢で、学校の勉強は有無を言わずさせる。漢字の書き取りも泣こうが喚こうがさせる！その位の態度で大丈夫です。

思春期に差し掛かると、もうミニ大人なので「大人目線で接する」事が大切です。過保護、過干渉を辞め、親の方から少しずつ子離れをして自立を促しましょう。

思春期の子供には同性の親が寄り添ってあげる

思春期になると、娘は父親に嫌悪感を覚えたり、男の子は母親の干渉を煙たがり始めます。実はこの頃になると、子供と性が異なる親が果たせる役割はそれほど多くは無いのです。この頃の子どもに寄り添えるのは「同性の親」になります。

娘を持つお父さんは母親のサポート、息子を持つお母さんは父親のサポートをするなど、親同士で支え合ってください。（参考文献：「本当に頭がいい子の育て方」高濱正伸）